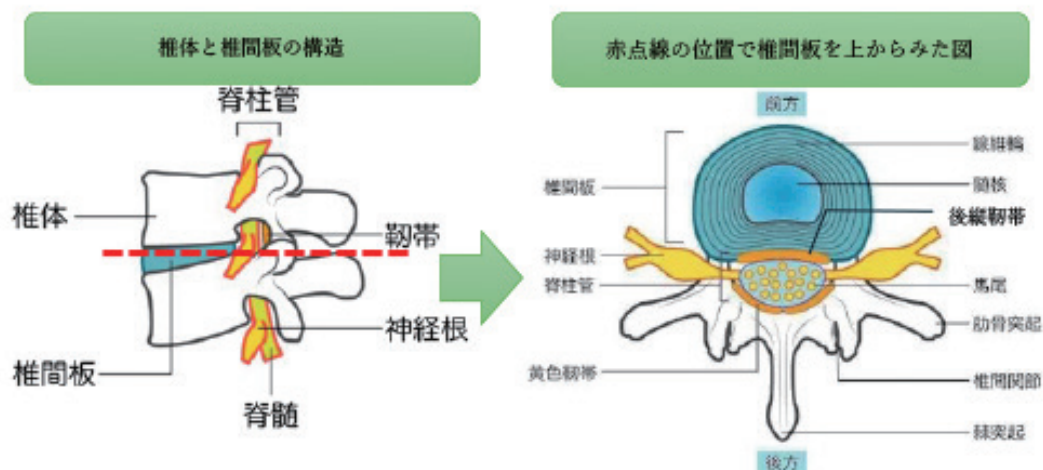
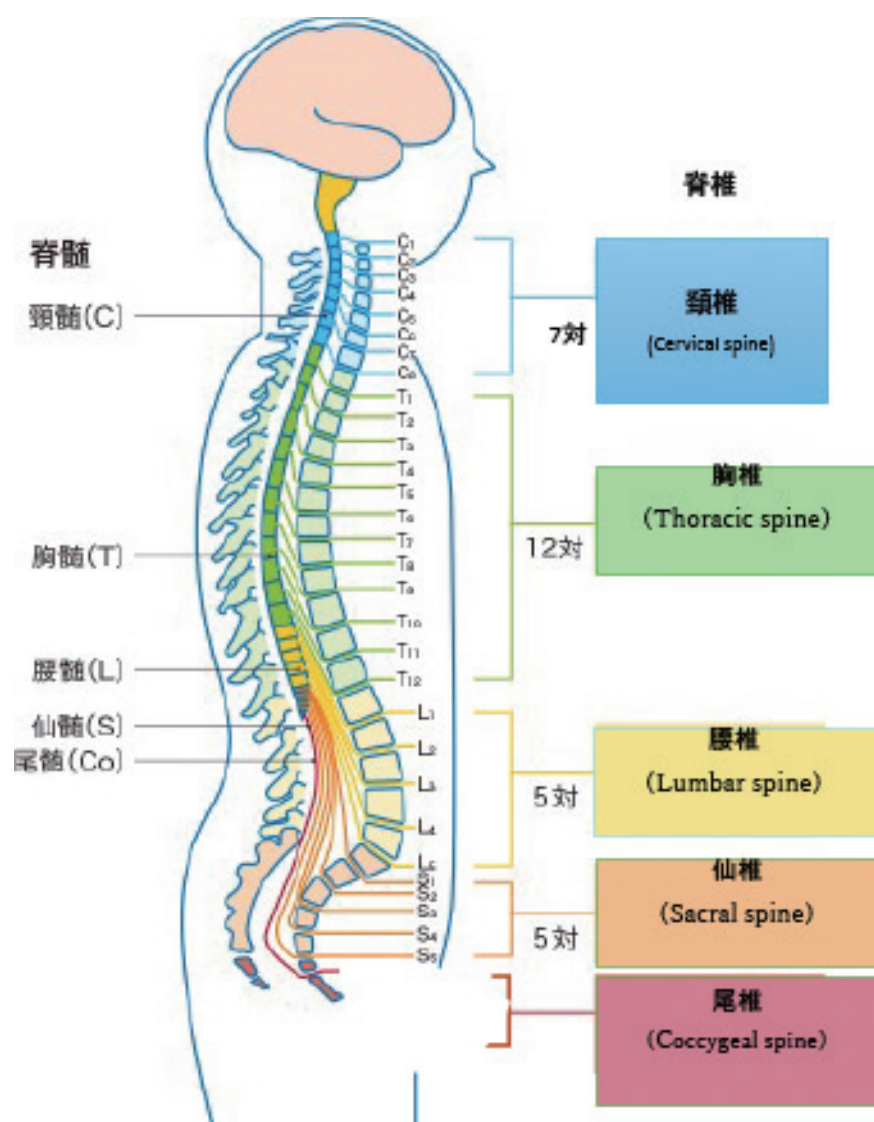


頸椎・腰椎 MRI 検査を受診された方へ

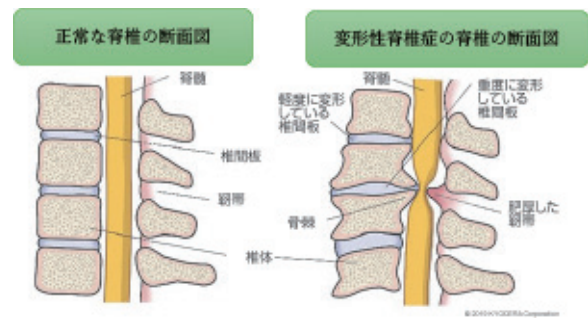
頸椎・腰椎 MRI 検査に関係する用語について、以下で説明させていただきます。



変形性脊椎症

変形性脊椎症とは頸椎、腰椎の椎間板や関節の変形、脊椎のかどに生じる突起物、靱帯の石灰化などによって、脊髄から出ている神経根が圧迫刺激を受けるもので、それぞれ変形性頸椎症、変形性腰椎症と称します。主に老化が原因となって変形するために、中高年齢者で多く見られます。変形性頸椎症では首・肩・腕の痛み、手のしびれ感、肩こりが主たる症状です。時に手の筋肉の萎縮や皮膚温の低下、発汗異常、爪の変形、歩行困難、排尿困難、頻尿なども起こる可能性があります。

変形性腰椎症では腰痛、下肢痛、下肢の筋力低下、下肢のしびれ感が主で、歩行困難、排尿困難、頻尿なども起こる可能性があります。

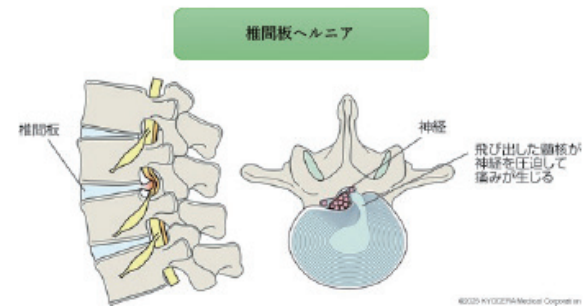


椎間板ヘルニア

椎間板ヘルニアは、脊椎の間にあるクッションの役目を果たしている椎間板と呼ばれる軟骨が飛び出してしまう、脊髄や神経根が圧迫され障害を起こす状態です。組織の老化や強い衝撃、姿勢の悪さなどが原因となります。

頸椎椎間板ヘルニアは頸髄の神経根が圧迫されて起こります。肩から腕にかけてのしびれ、脱力感、首の痛み、歩行障害（痙性麻痺）が主症状です。

腰椎椎間板ヘルニアは腰髄の神経根が圧迫されて起こります。腰から足までのしびれ、痛み、脱力感、筋力低下、知覚障害が主症状です。



椎間板変性

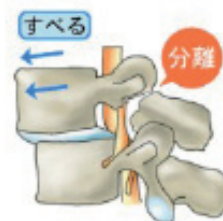
椎間板は老化により組織の構造や成分が変化し、弾力性が低下して厚さも薄くなっていきます。進行すると椎間板のクッション性が少なくなり、椎間板の一部が横に膨らんだ状態（膨隆）になって首や腰の痛みの原因になることもあります。症状がなければ加齢性の変化であり特に心配する必要はありません。

脊椎分離症・すべり症

脊椎分離症は、脊椎を構成する椎体と椎弓が分離して起こります。脊椎すべり症は、脊椎分離の進行によって上の椎体が下方前部にずれるものです。先天的な場合と、形成不全や骨折などが原因となって発症する場合がありますといわれています。スポーツが要因となることがあり、若年層の腰痛や下肢のしびれ感の原因となりやすく青少年やスポーツ選手に多く見られます。

分離症が一度完成すると、再び骨が接合することはありません。また時には脊椎の分離がなくてもすべり症が起きることがありますが、椎間板の変性が主な原因で、変性すべり症といわれています。

分離すべり症
● 分離を伴う
● 脊椎分離症から発展

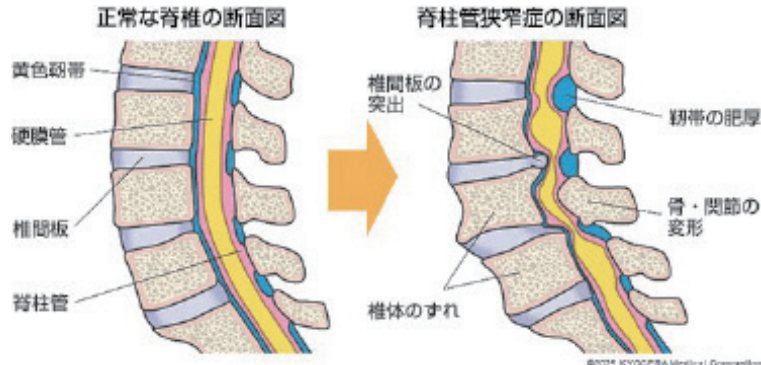


変性すべり症
● 分離を伴わない



脊柱管狭窄症

脊柱管狭窄症は、脊柱（＝背骨）内部の管が狭くなることによって神経が圧迫されて起こります。原因は老化による脊柱の変性や椎間板ヘルニアなど様々で、主に腰部に生じます。症状としては歩行時の下肢の痛みや、しびれ、筋力低下などが生じることがあります。



頸椎・腰椎検査で上記のような所見を認めた場合は程度によって B（軽度変化）～ E（要治療）判定となりますが、いずれの所見においても症状が続く場合は一度整形外科でご相談ください。

